

インドネシア・西カリマンタン州における ダヤック人政治エリートの形成史

— クタパン県の事例から —

Historical Formation of the Local Dayak Political Elites in West Kalimantan, Indonesia:

The Ketapang Regency Case

西 島 薫

公立小松大学

Abstract: This study examines the historical formation of the local Dayak political elites of the Ketapang regency, West Kalimantan, during the colonial to democratic period. Democratization after the fall of the Suharto authoritarian regime has led to the rise of new local political elites in regional societies. In the case of West Kalimantan, the local Dayak political elites began to compete with other ethnic groups, such as Malays and Javanese. Some Dayak political elites have occupied positions of authority, such as governor and regent. This study reveals how the Dayak political elites formed in tandem with the transformation of state systems, based on the Ketapang regency case. Furthermore, the local Dayak political elites in the Ketapang regency, who have held the position of the regent or acting regent, come from the aristocratic families of the same Dayak village located inland of the Ketapang regency. We explore why the Dayak elites of the same origin could achieve the position of regent. First, the children of the aristocratic families in the Dayak village, where Christian missionary work began, ascended socially through access to Western education. The children or grandchildren of the first generation of the Dayak political elite in the Suharto regime could hold relatively advantageous positions for a future political ascent. Simultaneously, no transformation of the state system occurred, which could further the rise of new Dayak political elites. Third, the local Dayak political elites, who could compete for the position of the regent in the Democratic period, have been limited to a few Dayak political elites, who are direct descendants of the first generation. We conclude that these factors brought about the local Dayak political elites of the same origin in the Ketapang regency.

Keywords: Indonesia, Dayak, Kalimantan, Democratization, Local political elites

1. はじめに

1.1. 本研究の背景

本稿の目的は、インドネシア西カリマンタン州クタパン県を事例に、オランダ植民地期から民主化期までの、ダヤック人地方政治エリートの形成過程を明らかにすることである。1998年のスハルト権威主義体制崩壊後、インドネシアでは州知事や県知事などの地方首長の選出に選挙制度が導入されたことで、地方各地では政治勢力の付置に変化が生じた。西カリマンタン州では、スハルト体制期まで沿岸部に暮らすムラユ人たちが、内陸部に暮らすダヤック人にたいして、政治経済的に優位な地位を占めてきた。しかし、地方首長の直接投票制度が導入されると、ダヤック人政治エリートたちが州知事や県知事の地位に就くようになった。西カリマンタン州南端部のクタパン県でも、スハルト体制崩壊以降に3人の地元出身の県知事が誕生した。3人の県知事のうち2人はダヤック人だった。西カリマンタン州のダヤック人たちにとって、民主化期とはインドネシア革命期から約50年後におとずれた「革命期」だった。

インドネシアはオランダ植民地期、日本軍政期、蘭印民政期、インドネシア革命期、スカルノ政権下の議会制民主主義体制期、スハルト政権下の中央集権体制期そして民主化期など複数の体制転換を重ねてきた。それぞれの体制転換期、地方社会では植民地体制期の在来民官僚、慣習的権威者、宗教的リーダー、軍人あるいは地方政府の役人などさまざまな社会的背景を持つ地方政治エリートが台頭した。ただし、インドネシアの地方政治に関する先行研究では、地方政治エリートの長期的な形成過程には研究の焦点が当てられてこなかった。岡本は、インドネシアの地方政治エリートには世代的な連続性がみられず、植民地期から民主化期までの地方政治を通時的に論じた研究がおこなわれてこなかったことを指摘している [岡本 2019: 33]。同様に、西カリマンタン州のダヤック人政治エリートに関しても、その長期的な形成過程に焦点を当てた研究はおこなわれてこなかった。また、インドネシアの地方政治に関する先行研究は、おもに革命期と民主化期の地方政治エリートの動向に焦点を当てる傾向にあった。ダヤック人政治エリートに関する先行研究でも、革命期と民主化期の地方政治エリートの台頭におもな焦点が当てられてきた [森下 2015; Tanasaldy 2012]。しかし、本稿の事例を通じて明らかにするように、ダヤック人政治エリートたちは複数の体制転換をまたいで形成されてきた。さらに、クタパン県のダヤック人政治エリートには世代的な連続性がみとめられる。西カリマンタン州クタパン県では、インドネシア独立以降、クタパン県のダヤック人たちの中から1人の県知事代行と2人の県知事が誕生した¹⁾。スハルト体制期に県知事代行をつとめた P. Y. デンゴール Petrus Yosef Denggol (以下、デンゴール)、そして民主化期に県知事になったヘンリクス Henrikus とマルティン・ランタン Martin Rantan (以下、マルティン) は、クタパン県内陸部に位置するスルンカ集落の首長層の出身者たちである [地図1参照]。そうであるならば、ダヤック人の地方政治エリートは、長期の歴史の変動との関係で形成されてきた特殊な集団であることが指摘できる。本稿では、特殊な集団としてのダヤック人政治エリートが形成されてきた歴史的経緯に焦点を当てる。



図1 西カリマンタン州の地図

出典：Badan Infomasi Geospasial のHP を参照に筆者作成

本稿の対象となるのは西カリマンタン州クタパン県である。オランダ植民地期まで、複数のムラユ人王国が現在の西カリマンタン州にあたる地域を統治していた。現在のクタパン県はマタン王国が統治していた領域と大きく重なり合う。本稿では、地理的範囲を指す場合は西部カリマンタンと表記し、行政的範囲を指す場合は西カリマンタン州と表記する。2021年の西カリマンタン州全体の人口は約547万人である [BPS Kalimantan Barat 2022]。また、クタパン県の人口は約58万人である [BPS Ketapang 2022]。人口から見ればクタパン県は西カリマンタン州の中では中規模の県である。本稿で用いる資料はオランダ植民地政府の資料、クタパン県のカトリック教会による出版物、ダヤック人政治エリートの自著、西カリマンタン州のダヤック民族主義に関する先行研究などである。くわえて、デンゴール、バンタンそしてレハールの親族へのインタビュー調査を用いる。また、2022年10月29日よりデンゴールの息子（P. Denggol）がインターネット上で、父の生い立ちに関する記事の連載を開始した²⁾。本稿でも可能な限り、当該連載の内容を参照する。

1.2. 本研究の位置づけ

インドネシアにおけるエリート形成過程や体制転換期のエリートの動向に関する研究は、オランダ植民地末期からインドネシア独立にかけての革命期、およびスハルト体制末期から民主化期に焦点を当てて研究がおこなわれてきた。それぞれの研究では国家から県までさまざまな行政単位のレベルにおけるエリートの動向に焦点が当てられてきた。

インドネシア独立期に関する研究はジャワに集中している。アンダーソンは、日本軍政期から7月3日事件までのジャワの都市を舞台に、独立の国際的承認と建国を進める旧世代のエリートと対立しつつも、社会革命を目指す急進的な若者たちが独立の原動力として闘争を展開した過程を仔細に描き出した [Anderson 1972]。中部ジャワでは革命期の騒乱の中で、インドネシア独立派の共産主義者やイスラーム勢力が地方政治の覇権を握った一方で、植民地期の役人たちは支配的な地位から追放された [Lucas 1985: 44-45]。他方で、西部ジャワでは植民地体制期に地方行政官だった王国の貴族たちは、行政能力および貴族ネットワークを駆使して革命期を生き延びた [岡本 2000: 220-221]。ジャワ以外の地方におけるインドネシア革命期の社会変容に関する研究もおこなわれた [Kahin ed. 1985]。例えば、革命期の東スマトラでは、オランダ植民地体制期に在来社会の上層部を占めていた王侯貴族やマレー人たちが没落した一方、独立運動に武装して参加した若者たちがインドネシア国軍に入隊し新世代のエリートとした台頭した [Langenberg 1985: 134-135]。アンボンでも、オランダ植民地体制下で権威を維持してきたキリスト教徒のエリートたちが勢力を失った一方、体制から締め出されていたムスリムたちが台頭する余地が生まれた [Chauvel 1985: 248, 259-260]。インドネシア革命期に関する先行研究は、ジャワだけではなく地方各地でも社会勢力の布置の転換が起こったことを明らかにした。

革命期に支配的な地位を追われた地方王権の貴族たちが、革命期後のインドネシアを生き延びた過程に焦点を当てた研究もおこなわれた。マゲンダは、東部カリマンタン、西部ヌサトゥンガラそして南部スラウェシの王国の旧貴族たちの革命期からスハルト体制期まで生存戦略を比較した [Magenda 1989]。一部の王国の旧貴族たちは、政党、宗教組織や知識人などさまざまな新興勢力と競合しながらも、地方役人や政治家に転身することで、インドネシア独立後も存続した [Magenda 1989: 176-177, 247, 371-373]。本稿との関係で重要な点は、外島地域では、植民地期に高等教育を受けた一部の旧貴族たちが、独立後も行政組織を拠点として存続したことである [Magenda 1989: 897-898]。本稿で指摘するように、植民地期に教育を受けた第一世代のダヤック人政治エリートたちが、蘭印民政期からインドネシア独立期に行政組織に組み込まれたことが、ダヤック人政治エリートの世代間に連続性をもたらした重要な要因である³⁾。

民主化期には、地方政治エリートに関する研究が数多くおこなわれた。民主化期には、スハルト体制期に胚胎された地方エリートたちがスハルト体制崩壊後に地方政治の前面に出てきたことが指摘されてきた。中央でも地方でも旧体制の政治エリートたちが民主化期の制度変更に適応することで、スハルト体制期に獲得した政治経済的な利権を堅守し、体制転換を生き残ったことが指摘された [Robison and Hadiz 2006; Hadiz 2010]。西カリマンタン州では、スハルト体制期に主要な産業が育たなかったため、有力な政治家や実業家などが登場せず、民主化期には中小の有力者たちが群雄割拠していることが指摘されている [森下 2015: 201]。また西カリマンタン州のダヤック民族主義と体制転換の関係に焦点を当てた研究もおこなわれてきた。タナサルディは、オランダ植民地期から民主化期までの体制転換の中で浮沈を繰り返してきたダヤック民族主義と

ダヤック人政治エリートの台頭の関係について通史的に分析している [Tanasaldy 2012]。タナサルディの研究は、州レベルの視点から体制転換とダヤック人政治エリート台頭の関係や村落部のダヤック人たちの周縁化の歴史を明らかにしている。本稿が対象とする政治エリートの世代的な連続性に関しては焦点が当てられていないものの、時代ごとの民族主義の趨勢と州および県レベルのダヤック人政治エリートの動向に関して仔細に記述されており、本稿でも適宜参照する。

多くの先行研究はインドネシア独立期および民主期という2つの体制の転換前後の政治エリートの台頭や継続性を指摘してきた。他方で、地方政治エリートたちが体制転換の間をどのように生き抜いたかに関しては研究の焦点がほとんど当てられてこなかった。そのため、世代を超えた地方政治エリートの形成史に関しては明らかにされてこなかった。本稿では、クタパン県知事を輩出したスルンカ集落の大首長に系譜的起源を持つバンタン Bantang、レハール Rehal そしてデングールという3人のダヤック人政治エリートの系譜に着目する。民主化期にはこの3人のダヤック人の末裔たちの中から、クタパン県における地方政治エリートたちが登場した。本稿では、一地域の大首長の系譜からダヤック人政治エリートが台頭した過程を明らかにすることで、地方エリートの系譜的連続性の要因について明らかにする。

2. オランダ植民地体制期のダヤック人

2.1. ムラユ人王国の統治下のダヤック人

西部カリマンタンは中国大陸、マレー半島、ジャワ島そしてスマトラ島を結ぶ海の交易路に面している [図1 参照]。西部カリマンタンの熱帯雨林は、燕の巣、沈香、樹脂などの林産物を市場に供給しており、大河川の河口部や合流地点には、シンタン王国、ポンティアナック王国やマタン王国などのムラユ人王国が勃興した。内陸部の森林で採取された林産物は河川を經由し、沿岸部で交易活動に従事するマタン王族をはじめとするムラユ人たちを經由して、西部カリマンタン周辺の交易港へ運ばれた [Ota 2010: 89-90]。他方、中国製の陶器、織物や塩などの外来品が商人たちによって西部カリマンタンまで運ばれ、ムラユ人たちによってダヤック人と取引された [Ota 2010: 89-90]。

現在の西カリマンタン州には、ムラユ人、ダヤック人、華人やジャワ人などが居住する。その中でもムラユ人とダヤック人が西カリマンタン州における二大勢力を形成している。沿岸部には「海の人」(orang laut) や「商人」(nyaga) と呼ばれるムラユ人たちが居住している。これらの呼称は多くのムラユ人たちが沿岸部で交易に従事してきた歴史を示している。他方で、内陸部には「陸の人」(oranga darat) と呼ばれるダヤック人たちが居住している。現在のクタパン県における民族別の人口比に関する正確な統計はないものの、県内におけるダヤック人とムラユ人の人口比が拮抗していることは確かである。19世紀からオランダ植民地政府は、西部カリマンタンの諸王国と契約を締結することで支配下に置いた。1920年頃には、西部カリマンタン各地の王位の後継者たちは、在来民官史養成学校 (OSVIA; Opleidings School Voor Inlandsche

Ambtenaren) で行政官としての教育を受け、自治領長に就任した。クタパン地域でもマタン王族たちの一部は、地区や郡といった下位行政単位の役人になり、マタン王国はオランダ植民地体制へ組み込まれた⁴⁾ [Militaire Memorie van de Onderafdeling Beneden-Matan 1930]。他方で、ダヤック人たちは植民地政府の行政組織でも役職を得ることはできず、マタン王国の抑圧下に置かれていた。ダヤック人たちは収穫物の一部をマタン王族に貢納しなければならず、さらにコミット (komit) と呼ばれる労役にも従事していた [Dewall 1862: 11-12]。内陸部のダヤック人たちの中から、現在の地方政治で地方首長の座を競い合う政治エリートが生まれる契機となったのは、20世紀初頭のカトリック教会の進出である。現在では西カリマンタン州のダヤック人たちのほとんどはキリスト教徒である。クタパン県プサグアン地域のスルンカ集落は県内でカトリック教会の布教が最初に開始された集落である。

2.2. ダヤック・プサグアン人の概要

西部カリマンタンのダヤック人たちは複数のサブ・グループに分かれている。ダヤック人たちの集落はおもに河川流域に点在しており、多くの場合は河川の名前とダヤック人のサブ・グループの呼称は一致する。プサグアン川流域の集落に暮らすダヤック人たちはプサグアン人 (orang pesaguan) と呼ばれる。

19世紀末の記録によれば、プサグアン地域は、プサグアン上流とプサグアン下流に分かれていた。スルンカ集落はプサグアン上流地域に位置する集落の本村であり、周囲にはダハス (dahas) と呼ばれる数世帯からなる小さな集落があった [Barth 1896: 101]。クタパン地域を訪れたカトリック教徒の華人の報告をきっかけに、プサグアン地域でのキリスト教の布教が始められた。プサグアン人たちの間でいち早くキリスト教への改宗が進んだ要因としてつぎの2点が重要だったと考えられる。第一に、プサグアン人たちの間に首長層と平民層の間に明確な序列があったことである。西部カリマンタンでは各々のダヤック人集落のリーダーシップのあり方は地域によって異なる。とくにプサグアン川流域のダヤック人集落は階層的な傾向が顕著だった。オランダ植民地体制期まで、プサグアン川流域の各ダヤック人集落の首長は、オチャン Ochang と呼ばれる大首長からの系譜的な連続性をもつ貴族たちが就任してきた [Sukanda and Raji'in 2007: 6-14]。スルンカ集落の大首長は慣習法に関して大きな権限を持っていた。一般的に集落の首長の影響力が強いほど、首長の親族や追従者を中心とした集団改宗は起こりやすい傾向にある [cf. 小池 2104: 283]。スルンカ集落では、大首長の改宗から1年後にカトリック教会によって学校が建設されており、大首長に追随して多くの村人たちが改宗したことが推察される。第二に、キリスト教の布教が始まる直前の1914年、プサグアン人たちはオランダ植民地政府への蜂起に参加した。プサグアン地域では1914年5月にトゥンバンティティ戦争 (Perang Tumbang Titi) と呼ばれるオランダ植民地政府への蜂起が勃発した。蜂起の発端は、マタン王国がオランダ植民地政府と契約を結んだことである。契約には住民への課税やマタン王族たちのダヤック人たちにたいする権限の

制限が含まれており、契約締結に不満を抱いたクタパン南部のマタン王族が一部のプサグアン人々を率いて蜂起を起こした。蜂起は、多くの死傷者を出した後、7月の初めには鎮圧された [Lontaan 1975: 97; Lulofs 1914: 493-494]。蜂起の後オランダ植民地政府は、みずからの力を住民たちに誇示するため、クタパン県南部の巡回をおこなった [Lulofs 1914: 494]。スルンカ集落でカトリック教会の布教が開始されたのは蜂起から4年後であり、蜂起によってプサグアン人々がいち早くオランダ植民地政府と対峙したことも、プサグアン人々たちの間でキリスト教の受容が進んだ背景にあっただろう。

プサグアン地域では大首長の親族たちが指導的役割を果たしていた。カトリック教会が布教を始めた当初、プサグアン地域の人々も少なからず蜂起の影響を受けていた。そして、教会による布教の開始とともに、大首長の子弟たちの中から親世代とは異なった経路によって、知識人そして政治エリートへの階梯を登るものがあらわれた⁵⁾。

3. 知識人から政治エリートへの転身

3.1. ダヤック人知識人の誕生

19世紀末からカトリック教会による布教活動が活発化したことで、ダヤック人の暮らす内陸部まで教育が普及した。1919年には、スルンカ集落にクタパン地域で初めてカトリック教会による学校が設立された。そして、20世紀初頭、ダヤック人々たちの中から都市部でカトリック教会による西洋式の教育を受けた知識人たちが現れるようになった。

西部カリマンタンでのカトリック教会の布教の初期に入信したのは都市部の華人たちだった⁶⁾ [Steenbrink 2008: 504]。カトリック教会は1885年、華人地区であるシンカワンに拠点を設立し、その後、華人を中心に信徒を増やしていった。1905年には西部カリマンタンはボルネオ使徒座地牧区として認定され、オランダ人神父パシフィクス・ボス Pacificus Bos (以下、ボス) が西部カリマンタンに派遣された。1918年に西カリマンタン使徒座地牧区はボルネオ使徒座代理区に昇格した⁷⁾ [Panitia Perayaan 50 tahun Keuskupan dan 25 Tahun Uskup Ketapang⁸⁾ 2004: 8]。1900年代、オランダ人神父や伝教師(カテキスト)たちは、内陸部のダヤック人々たちへも布教を開始した。カトリック教会の内陸部への布教は、ダヤック人の子供たちに教育をもたらした。20世紀初頭、オランダ植民地政府の倫理政策のもと、蘭領東インド各地に初等教育機関として3年制の国民学校(volkschool)が設立されていた [Penders 1968: 66, 99-100]。教会はダヤック人々たちが暮らす内陸部に学校を設立し、ダヤック人々たちを教師として任命した。さらに、シンカワンのニャルンコップに教育拠点として国民学校、標準学校(standaardschool)や師範学校(normaalshool)を設立した [Muskens 1974: 318]。各地の国民学校修了者の子供たちの一部は、西部カリマンタン各地の師範学校に集められた。師範学校の授業はムラユ語でおこなわれており、卒業者は国民学校の教師になることができた [Steenbrink 2007: 293]。また各地の集落から来たダヤック人々たちは寄宿舎で生活をした。寄宿舎のダヤック人の子供たちは、集落での生活とは全

く異なった生活だっただろう。例えば、西部カリマンタンの内陸のある寄宿舎では、起床から学習そして就寝までの時間や共同生活の役割分担が決められており、ダヤック人の子供たちは西洋式の規律に従った生活を送った [Flavianus-Huybers 1924: 29-30]。カトリック教会のもたらした教育は、伝教師や国民学校の教師といった西洋的知識と規範を身に着けたダヤック人知識人を輩出する教育機関としての役割を果たした [Steenbrink 2007: 293-295]。

クタパン地域でカトリック教会の布教が始まったのは1918年である。1918年、ボスは華人の教徒からの報告にもとづいてスルンカ集落を訪問した。ボスは10日間にわたってスルンカ集落の大首長グマロー・ムリアル Gumalo Moerial (以下、ムリアル) にカトリックの教義を説いた。その結果、ムリアルは洗礼を受けヨセフという洗礼名を与えられるとともに、カトリックに入信した。1919年、カトリック教会はスルンカ集落に国民学校を設立した [Panitia 2004: 8]。1918年の訪問で、ボスはムリアルの孫であるバンタンをポンティアナックへ連れ帰った。バンタンの父はトゥンバンティティ戦争に参戦後、オランダ植民地政府から逃れるため中部カリマンタンに潜伏しており、スルンカ集落に戻らなかった。孤児になったバンタンを見たボスが、ポンティアナックまでバンタンを連れて帰った。その後、バンタンは現在のポンティアナックで学校教育を受け、1923年にシンカワンの国民学校に宗教教師として派遣された [Panitia 2004: 8]。1926年、バンタンはスルンカ集落に戻り国民学校の校長に就任し、その後、クタパン市内の国民学校教師として、クタパン地域を転々とした⁹⁾。1927年、ボスはプサグアン地域を再び訪問すると、スルンカ集落出身のレハールを国民学校の教師に任命した。レハールは、スルンカ集落のムリアルの後継者である大首長の息子だった [Sukanda and Raji'in 2007: 14]。レハールの父と、ムリアルには系譜的な関係があると推察されるが、詳細は不明である。1927年当時、レハールは20歳を超えており正式な学校教育は受けていなかった。ただし、レハールは独学で勉強をしていたため、カトリック教会の神父によってプサグアン地域の学校教師として抜擢された [Panitia 2004: 9]。その後、レハールはクタパン北部のダヤック人集落の国民学校、そしてクタパン市内の国民学校の教師として勤務した¹⁰⁾。また1927年の訪問で、ボスは、スルンカ集落のデンゴールをポンティアナックへ連れて帰った。デンゴールの父はムリアルの息子だった [cf. P. Denggol 2022-10-29]。しかし、デンゴールの父は、デンゴールが生まれた1年後の1915年頃に死去した [Donatus 1936]。デンゴールはニャルンコップの標準学校を卒業し、その後、神学校でカトリックの教育を受け、1939年、カトリック教会によって伝教師に任命された [Loon 1992: 26; Denggol 1994]。そして1941年、デンゴールはサンガウ地域のダヤック人集落に宗教教師として布教のため派遣された。デンゴールは集落に礼拝所を建設しつつ集落に住み込んだ。デンゴールは周囲のダヤック人集落を訪問し布教をおこなうことで、徐々に信徒を獲得していった [Denggol 1994: 9]。

1910年代から1940年代にかけて、カトリック教会のもたらした教育とともにクタパン県のダヤック人の中から近代的教育を受けた第一世代の知識人たちが現れる時期だった。大首長の親族の中でも、実父を失ったバンタンやデンゴールあるいは独学で勉学を修めたレハールといった首

長層の子供たちが学校教師になった。本来であれば首長層の子供たちは、慣習法を学び、集落の首長層の次の世代を担う存在だった。ただし、3人は出生の集落を離れ教師となることで、親世代とはまったく異なる経路をたどりダヤック人知識人になった。

3.2. 異端者としてのダヤック人知識人

ダヤック人知識人とは、カトリック教会の進出とともに生まれた新興の社会階層であり、知識人たちの説くカトリックの教義実践は村落部の慣習とは乖離していた。オランダ植民地期のダヤック人集落の権威者たちは、慣習法の知識、首長からの系譜的連続性あるいはムラユ人王族との関係などを権威の源泉としていた。他方、教会の布教はオランダ植民地政府の庇護の下でおこなわれており、ダヤック人知識人たちの教義実践の正統性は植民地政府によって支えられていた。サンガウ県に派遣されていたデンゴールの布教の経緯は、ダヤック人知識人が当時の内陸部の人々の間では異端者だったことを示している。

布教を始めた当初は、デンゴールは地元の郡長や村長からの抵抗にあった。郡長の配下だったダヤック人村長たちは、行動の粗を探し糾弾するためデンゴールを監視するようになった。郡長はデンゴールを呼び出し、カトリックはダヤック人の慣習に違反しており、デンゴールを追放すると脅した。デンゴールは、ダヤック人の慣習 (In. adat-istiadat) は信仰 (In. kepercayaan)、慣習法 (In. hukum adat) そして社会文化 (In. sosial budaya) から成り立っている。自身はカトリックの信仰を教えているだけで、信仰や社会文化には関わっていないと抗弁した。郡長は「もういい。何か問題を起こしたらこの土地から追い出すぞ」とデンゴールを恫喝した [Denggol 1994: 11]。西洋式の教育で育ったデンゴールの抱懐する知識や信念は、地域の行政官たちにとっては受け入れがたいものだったことが推察できる。

1942年から1945年まで西部カリマンタンは日本軍政の統治下に置かれた。日本軍政はカトリックを親オランダの宗教とみなし、西部カリマンタンで活動していたオランダ人神父たちはサラワクのクチンに送還された。憲兵隊の配下のムラユ人たちが集落にあらわれるようになり「オランダが去ったのだからカトリックも去らなければならない」と村人たちに吹聴した [Denggol 1994: 20-21; Loon 1992: 53]。村人たちの間では、キリスト教徒は逮捕され殺されてしまう、という噂が蔓延するようになり、村人たちはデンゴールを遠ざけるようになった [Denggol 1994: 16-17]。さらに、デンゴールは集落に暮らす村人たちからの批判にもさらされた。カトリック教会の説く教義や実践は在来の慣習と軋轢を生んでおり、カトリック派と慣習派の村人たちは対立した。例えば、村人たちは慣習的に赤子の出生後に呪術師のもとで命名儀礼をおこなっていた。デンゴールは呪術師が命名儀礼をおこなう前に、先回りして赤子に洗礼名を与えていた。ただし、呪術師による命名儀礼をおこなわなかった赤子が死亡すると、慣習派の村人たちはデンゴールを糾弾した [Steenbrink 2007: 319, 530]。

ダヤック人集落でのデンゴールの経験は、ダヤック人知識人の置かれた不安定な社会的立場を

端的に示している。少年期から青年期にかけて集落を離れ西洋式の教育を受けたダヤック人知識人たちは、宗教実践や知識において、地域社会の人々からは乖離した存在だった。さらに、日本軍政期にオランダ植民地政府とカトリック教会が撤退すると、ダヤック人知識人たちの地位は不安定になった¹¹⁾。日本軍政期の不安定な状況下で、ダヤック人知識人たちは、学校教師や伝教師として活動を継続していた。

3.3. 知識人から政治エリートへの転身

1945年から1949年まで西部カリマンタンは蘭印民政府（NICA: Netherlands-Indie Civil Administration）期を迎えた。太平洋戦争終結後の1945年9月、蘭印民政府の役人がオーストラリア軍とともにポンティアナックに上陸した〔Ooi 2013: 121〕。西部カリマンタンにおける蘭印民政府の確立とともに、地域社会の異端者だったダヤック人知識人たちは政治エリートとして台頭した。

蘭印民政府は東インドネシア、スマトラおよびカリマンタンをインドネシア連邦（Federal Indonesia）として独立させ、オランダの傀儡国家を樹立することを計画した〔Somers Heidhues 2003: 215〕。他方、1945年8月17日のスカルノによるインドネシア共和国の独立宣言は、ラジオや新聞をつうじてカリマンタンにも伝わっており、人々は連邦派と共和国派に分かれていた〔Ooi 2013: 118, 120-121〕。日本軍政期に抑圧下に置かれていたダヤック人知識人たちは、オランダの再上陸を望んでいた〔Tanasaldy 2012: 95〕。住民が親連邦派と親共和国派に分裂した状況に直面した蘭印民政府も、ダヤック人知識人たちを体制に取り込むことでダヤック人たちの支持を調達する戦略をとった〔Tanasaldy 2012: 80-81〕。蘭印民政期にはダヤック人のための官製組織や在野の政治組織が設立され、ダヤック人知識人たちは政治エリートに転身した。1946年1月、蘭印民政はダヤック・アフエア・オフィス（Dayak Affair Office、以下DAO）を設立した〔Tanasaldy 2012: 86-87〕。DAOは、ムラユ人王国によるダヤック人への圧政やダヤック人同士の土地紛争などに対処することを目的として設立された〔Denggol 1994: 31; Tanasaldy 2012: 86-87〕。DAO議長には、カプアス川上流地域出身のダヤック人であり、在来民中堅官吏養成学校（MOSVIA）の学生だったウファン・ウライが任命された〔Tanasaldy 2012: 86〕。クタパン県出身者としては、当時宗教教師だったバンタンとデンゴールが抜擢された。DAOに参加したダヤック人知識人たちは、地方政府の役人として、蘭印民政府とダヤック人たちの仲介役を担った。バンタンはクタパンで郡長（asisten demang; 1948-1950）としての地位を与えられ、デンゴールはムリアウ郡長（asisten demang; 1946-1952?）およびムリアウ郡議会議長（voorzitter raad Meliau; 1948-1952?）としての地位が与えられた。こうしてバンタンとデンゴールは行政機構に吸収された。

1946年10月、西部カリマンタンの在来民の代表議会である西カリマンタン評議会（West-Kalimantan Raad）が発足した。評議会は各自治領の代表15人、華人代表8人、ダヤック人代表

7人、オランダ人4人、その他の民族代表6人の計40人の議員によって構成されていた。各自治領長だったムラユ人王国の王族とともに、バンタンは西カリマンタン評議会に議員に選出された [Davidson 2008: 39; Tanasaldy 2012: 81-82]。さらに、1947年5月12日、西部カリマンタンは西カリマンタン特別自治州 (Daerah Istimewa Kalimantan Barat) に再編され、特別自治州の代表議会には8議席がダヤック人たちに割り当てられた。クタパン県出身者のバンタンとデンゴールがダヤック人議員に任命された [Davidson 2008: 39; Tansaldy 2012: 93]。官製組織にくわえて在野のダヤック人たちによる政治組織も結成された。1945年10月、カプアス川上流のプトゥシバウでダヤック人知識人たちを中心にダヤック・イン・アクション (Dayak in Action、以下 DIA) が結成された [Davidson 2008: 37-38; Tanasaldy 2012: 90-91]。1947年、DIA はダヤック統一 (Persatuan Dayak、以下 PD) に改組するとともに、ポンティアナックへ本部を移動させた [Davidson 2008: 38; Tanasaldy 2012: 92]。

日本軍政期の抑圧下にあったダヤック人知識人たちは、再び上陸した蘭印民政を支持することで政治的上昇を果たした。バンタンとデンゴールは、蘭印民政体制の中で下位行政単位の長や代表議会の議員としての役職が与えられた。また、在野のダヤック人たちの政治組織である PD も組織された。オランダ植民地体制期まで学校教師だったバンタンとデンゴールは、ダヤック人民族主義を牽引する政治エリートへ転身した。

4. PD の拡大と終焉

4.1. ダヤック民族主義の地方への浸透

インドネシア独立戦争を経て、1949年、蘭印民政からインドネシア共和国へ主権が委譲され、カリマンタンはインドネシア共和国に組み込まれ、1957年には西カリマンタン特別自治州は西カリマンタン州に再編された。1949年からスハルト体制が発足する1966年まで、ダヤック人政治エリートたちは政治的地位の上昇と後退を経験した。

1949年、西カリマンタンがインドネシア共和国の主権下に置かれたため、DAO や特別自治州の代表議会は解体された。ただし、蘭印民政期に行政組織に組み込まれていたダヤック人政治エリートたちは、インドネシア独立後にも地方役人として行政組織に留まった¹²⁾。DAO の解体後、バンタンはクタパン郡で郡長 (asisten wedana: 1950-1955) として活動を続けた。また、サンガウ県からクタパン県に戻ってきたデンゴールは、1953年からクタパン県マタン上流地区役所に異動となり、その後、マタン上流地区長 (wedana: ?-1959) に昇任した。他方、マタン王を含むマタン王族の多くは日本軍政期に虐殺されており、かつてのムラユ人王族たちの影響力は大きく後退していた。1948年、当時のマタン王族のリーダーは、バンタンの政治的躍進を阻止するため、バンタンを内陸の僻地に配属させようと画策したが、ダヤック人政治エリートの台頭を抑えるだけの政治力はなかった [Stefanus ed. 2018: 60]。

蘭印民政期の官製組織が解体されたため、在野組織である PD がダヤック人政治エリートたち

の政治活動の中心になった。ポンティアナックでのPDの活動はクタパン県にも波及した。PDはポンティアナック以外にも支部を設立しており、クタパン県では1947年2月にPDクタパン支部が置かれた。カトリック教会は、PDクタパン支部が集会をおこなうさいには倉庫を集会場として提供した〔Stefanus ed. 2018: 42〕。ただし、1946年頃のクタパン市内のダヤック人の数は依然として少数であり、そのほとんどは市場で働く労働者だった¹³⁾〔Stefanus ed. 2018: 36, 42〕。市内のダヤック人たちの多くは学校教育を受けておらず読み書きができなかった。オランダ人神父は、ダヤック人たちへ読み書きの授業をおこなう計画を立てたものの、労働者として働くダヤック人たちに勉学に従事する意欲はなく、計画は頓挫した〔Stefanus ed. 2018: 42〕。PDクタパン支部の活動が本格化したのは、ダヤック人政治エリートたちがクタパン市内に活動の重点を移してからである。PDクタパン支部で指導的役割を果たしたのは、レハールとバンタンだった。1948年、地方役人としてクタパン市内に配属されたバンタンは、PDクタパン支部長に就任した。同じ頃、クタパン県内の国民学校で教師を務めていたレハールも、バンタンのもとでPD黨員として活動するようになった。PDの支持を拡大するためには、内陸部に暮らすダヤック人たちが集まることのできる常設の集会所を設けることが急務だった。バンタンはカトリック教会から資金を借り受け、市内の一面に土地を購入し、PDクタパン支部を置いた¹⁴⁾。当時、内陸部のダヤック人たちの間でもPDへの期待は高まっていた。オランダ人神父の日記には、1949年8月、バンタンがPDの支持を獲得するためプサグアン地域を訪問したさい、村人たちが大規模な儀礼をおこない、バンタンたちが「王を迎えるかのような歓待」を受けたことが記されている〔Stefanus ed. 2018: 70〕。

1950年、学校教師だったレハールがバンタンに代わりPDクタパン支部長に就任した。PDクタパン支部は、内陸部からもダヤック人たちを引きつけた。クタパン支部の建物は学校教育を受けるために内陸部からクタパン市内へ移住してきたダヤック人の子供たちの下宿として利用されるようになり、その後、PDクタパン支部周辺はダヤック人たちの居住区として発展した¹⁵⁾〔Stefanus ed. 2018: 63, 111〕。PDクタパン支部は都市部のエリートと内陸部のダヤック人たちを結び付ける結節点としての役割を果たしていた。ダヤック人政治エリートの政治活動は、1955年の総選挙および1958年の地方選挙におけるPDの躍進として結実した。スカルノは1950年憲法の制定とともに議会制民主主義を導入し、1955年に総選挙をおこなった。総選挙の結果、PDは全国118政党の中12番目の得票数を獲得し、地方代表議会に9議席を獲得した〔Davidson 2008: 42; Tanasaldy 2012: 99〕。PDは西カリマンタン州議会で第二党に躍進し、デンゴールもPD黨員として州議会議員に選出された。PDの躍進により西カリマンタンにおけるダヤック人たちの存在感と一体感は急速に高揚した〔Tanasaldy 2012: 101〕。1958年の地方選挙で、PDはさらに議席数を伸ばした。PDは西カリマンタン州議会の30議席中12議席を獲得し、州議会の第一党へ躍進した。PDは、党首ウファン・ウライを州知事（Kepala Daerah）に指名した。1960年、ウファン・ウライはダヤック人として初めての西カリマンタン州知事に就任した〔Davidson 2008: 42,

44; Tanasaldy 2012: 103]

1950年代、ダヤック人政治エリートたちが地方に活動の重点を置くようになり、カトリック教会の支援のもとPDの支持を地方まで拡大させた。とくにクタパンの学校教師だったレハールがPD支部長として活動するようになったことは、地方で活動していた知識人たちも民族主義が地方へ波及することで政治エリートへ上昇したことを示している。PDは西部カリマンタン各地の知識人をエリートへ転身させる重要な経路だった。

4.2. PD解党前後の地方エリートたち

1955年と1958年の選挙の結果、中央政府での党派対立が先鋭化し、議会制民主主義は行き詰まりをみせた。さらに、中央政府のジャワ偏重の経済政策のため、地方では中央政府に対する不満が噴出した[Feith 1962: 488-490]。スカルノは政治的危機を打破するために、1957年に指導された民主主義を打ち出し、1959年には中央集権的な1945年憲法に復帰した[Feith 1962: 541; 白石 1992: 43-45]。1959年、スカルノは地方主義の台頭を抑えるため、大統領令7号によって地方政党の活動を禁止した¹⁶⁾。そのため、地方政党だったPDは解党を余儀なくされた¹⁷⁾[Tanasaldy 2012: 109-110]。

スカルノ体制末期からスハルト体制期にかけて、第一世代のダヤック人政治エリートの世代交代が起こった。クタパン県のダヤック人政治エリートの中で最初に政治活動から引退したのはバンタンだった。バンタンは、クタパン郡長を務めた後、シンパンウル郡長(1957)、そしてスカダナ地区長(1958)に昇進し、1959年にはクタパン県議会議員に任命された。しかし、県議員に就任した2か月後に定年を迎え、バンタンは県議会議員を引退した¹⁸⁾。その後、バンタンはスロンカ集落へ戻り、政治活動からも引退した¹⁹⁾。レハールとデンゴールは、PD解党後も都市部で政治活動を続けた。PDの解党により、エリートがダヤック人の支持を背景に政治的影響力を伸ばすことは困難になった。国家体制が中央集権化する中で、レハールとデンゴールは地方政府の役人そして県議会議員として活動した。1946年に設立された宗教省の出先機関が1951年3月クタパン県にも設置された[Stefanus ed. 2019: 88]。レハールは、当時PDで指導的役割を果たしていたウファン・ウライの後押しによって、クタパン県宗教局のカトリック担当者として採用されていた。スハルト体制期には公務員と県議会議員の兼任が許されていたこともあり、レハールは1959年から1970年までクタパン県議会議員として活動した。レハールは、PD解党後、親スカルノ派のバルティンド(Partai Indonesia)に移党した。また、デンゴールは1959年までマタン上流地区長(wedana)を務め、その後、クタパン県役所の総務課に異動し、地方役人としての経歴を積んだ。

インドネシア独立後も、バンタン、レハールやデンゴールは地方役人や地方議会議員として地方のダヤック人政治エリートの中核的存在としての地位を保持した。とくにバンタンとデンゴールは地方政府の上位の役職を歴任した。インドネシア独立期からスハルト体制期にかけて地方政

府の行政組織に大きな変革がなかったことが、第一世代のエリートたちに安定した地位をもたらした。第一世代のダヤック人政治エリートたちは、PDの解党とともに政治的地位を向上させる有力な経路を失ったものの、地方役人としての安定した地位は第二世代を生み出す基盤になった。

5. スハルト体制期：政治エリートの世代交代

5.1. デンゴールの政治的台頭

1966年、クーデター未遂事件である9月30日事件をきっかけに実権を握ったスハルトが大統領に就任した。スハルト体制は国家優位の体制であり、西カリマンタン州では県知事ポストに軍出身者が配置されるようになった。州知事だったウファン・ウライは親スカルノ派であるという批判を受けるようになり、1966年に州知事から罷免された [Davidson 2008: 62; Tanasaldy 2012: 123]。州政府の高級ポストや県知事ポストからダヤック人たちが締め出され、軍人たちが配属されるようになった [Tanasaldy 2012: 123]。

地方政府でも上級ポストはジャワ人あるいは非地元出身の軍人が占めるようになり、中下級のポストはムラユ人たちが占められていた。つまり、人事権を掌握するポストはイスラーム勢力に占められており、ダヤック人たちは地方行政のあらゆるポストから締め出された [Tanasaldy 2012: 156, 167, 169]。スハルト体制期には民族、宗教、人種そして格差に関連する言説が抑圧され、ダヤック人たちが民族の名の下に集団として政治活動をすることは出来なくなった。またスハルト政権の親スカルノ派への抑圧も強まっていた。レハールは、PDの解党後、IPKI (Ikatan Pendukung Kemerdekaan Indonesia; インドネシア独立擁護連盟) に移党した。IPKIは多くの親スカルノ派の党員を抱えており、スハルト体制はIPKIに圧力をかけていた。スハルト体制の圧力の中、IPKIクタパン支部が解党したことで、レハールも政治活動から引退した [Tanasaldy 2012: 136]。バンタンとレハールが政治活動から引退したことで、第一世代のエリートで最年少だったデンゴールが、クタパン県のダヤック人たちの中心的存在となった²⁰⁾。スハルト体制期に政治的に躍進したのは、PD解党後にゴルカル党に入党したデンゴールである。デンゴールは、当時のクタパン県知事の信頼を得て、県庁の財務部長に昇任した。その後、デンゴールは1970年にジャワ出身の県知事が在任中に病死したため、ダヤック人県知事代行 (1970-1972) に任命された。スハルト体制期にはおもにムラユ人たちが県知事に指名されており、1970年代に地元出身の、それもダヤック人が県知事代行に就任したことは異例だった。デンゴールが、県知事代行に就任できた要因として、蘭印民政期から州レベルの代表議会の議員や高位の役人として経歴を積んできた政治経験と行政能力があげられる。くわえて、オランダ植民地期に高等教育を受けたムラユ人の王侯貴族たちが日本軍政期に処刑されたため、地方行政を担う人材が不足していたことも背景的要因だっただろう [Davidson 2002: 37]。ただし、デンゴールが代行職に在位した期間は2年間であり、ジャワ人やムラユ人たちが席捲する地方政府で、政治的影響力を確立することはなかった。デンゴールは県知事代行の任期を終えると、カトリック教会での活動を活発化させた²¹⁾。

第一世代のダヤック人政治エリートは、現在まで社会的名士としてその存在が広く知られている。そもそも地方役人や県議会議員としての地位は、社会的名士としての名声を確立するためには十分ではない。第一世代のダヤック人たちの名声は、カトリックの浸透と表裏一体の関係にあった。オランダから赴任してきた神父たちが布教をするためには、影響力のある地元出身のダヤック人たちの協力が必要だった。第一世代のエリートたちは、カトリック教会がクタパン地域で布教を始めた当初から教会の活動と深く関わっており、教会内部の会議や委員会での活動、集会でのスピーチ、あるいはオランダ人神父のダヤック人集落への訪問の帯同をおこなっていた [Stefanus ed. 2018: 86, 88, 113, 291]。3人の存在がダヤック人たちの間でも広く知られていたことは、彼らがカトリック教会の活動において中心的な役割を果たしていたことと関係しているだろう²²⁾。スハルト体制期、デンゴールは教会の活動に深く関わっていた。反共産主義を掲げるスハルト政権下では、ダヤック人のキリスト教への改宗が推し進められており、カトリックは内陸部のダヤック人たちの間まで急速に浸透した。また、1960年代からヨーロッパから開発援助がカトリック教会や関連組織を通じてインドネシアへ流入するようになった。各教区の教会は開発プロジェクトを担当するために社会使節 (Delsos : Delegatus Socialis) を任命して、プロジェクトを実行していた。プロジェクトを運営するため、カトリック教会は地元の神父や有力者を社会使節に任命した [Steenbrink 2015: 326]。クタパン県の教会は1973年2月、デンゴールを社会使節に任命した [Stefanus ed. 2018: 201]。カトリック教会は、信徒の大半を占めるダヤック人たちの社会福祉に大きな関心を向けていた。デンゴールは、社会使節として、信徒たちの生活上の問題の地方政府への伝達、教会への助成金の申請、教会による奨学金の設立などを担当し、地方政府、教会そして信徒たちの媒介者としての役割を果たしていた [Stefanus ed. 2018: 208, 214, 222, 256]。例えば、教会は僻地に暮らすダヤック人たちを市内近郊に移住させ、農業訓練をおこなう域内移住 (In. transmigrasi lokal) プロジェクトをおこなっていた。デンゴールはこの域内移住プロジェクトを担当しており、内陸部に暮らすダヤック人たちと関わることができた。スハルト体制末期まで、ダヤック人たちが民族として団結して政治活動をすることはできなかった。ただし、ダヤック人信徒を数多く抱える教会が実質的にダヤック人たちを結びつける役割を果たしており、第一世代のダヤック人たちは社会的名士としての地位を確立させることができた。

スハルト体制期、政治的上昇の途を閉ざされたダヤック人政治エリートは、カトリック教会での活動に力を注いだ。同時に、海外からもカトリック教会に資金が流入してきた。教会は、ダヤック人政治エリートと各地のダヤック人たちを結び付け、ダヤック人政治エリートが社会的威信を獲得する場だった。その後、第一世代の社会的名士としての影響力やカトリック教会との関係は、第二世代のダヤック人政治エリートたちに継承された。

5.2. 第二世代への世代交代

1970年代、クタパン市中心部のダヤック人たちは依然として少数だった。デンゴール、バンタ

ンやレハールの親族たち、および内陸部の他地域から移住してきた少数のダヤック人たちの親族たちが、クタパン市中心部で暮らしていた。1982年には第一世代で最年少だったデンゴールも社会使節の活動から引退した。スハルト体制後期には、第一世代の親族の中から新たなエリートの萌芽が生まれた。

教育の浸透とともに台頭した第一世代のエリートたちは、地方政府での役職やカトリック教会での活動を通じて、都市部のエリートとしての地位を確立してきた。第一世代の息子や孫たちの多くも高等教育を受け、教会や地方政府で活動することで、都市部のダヤック人コミュニティの中核を占めた。とくに第一世代のエリートたちの地方役人としての安定した地位は、子供に高等教育を受けさせるための必要不可欠な条件だった。デンゴールの子供たちの経歴は第一世代の教会や地方政府との近接性を端的に示している。学校教育を通じて地方政治エリートへの階段を登ったデンゴールは、子供たちにも学校教師になることを薦めていた。デンゴールには、13人の子供がいたが、そのうち8人は県政府の役人あるいは教師になった。デンゴールの息子のうち2人は、内務省アカデミー（Akademi Pemerintahan Dalam Negeri）に進学し、地方役人として経歴を積んだ。デンゴールの政治的、社会的な威信の継承者として期待されていたのは次男のH. デンゴールだった²³⁾。H. デンゴールは、1972年に内務省アカデミーを卒業すると、クタパン県庁の出納掛に着任した。その後、県内のダヤック人の居住地域であるマラウ郡そしてトゥンバンティティ郡の郡長を歴任した。1987年、H. デンゴールは、国内名門大学のマランのブラウイジャヤ大学で行政学の学士号を取得し、さらにその後、クタパン県内の郡長、県政府官房局の経済部長そして交通局長を務め県政府の上級ポストを歴任した [H. Denggol n.d.; P. Denggol 2022-01-11]。H. デンゴールは、スハルト期のダヤック人として地方政府の上級の役職に就くことができた第二世代の一人である。

スハルト体制期には、ゴルカル党の県議会の議席がダヤック人たちに数議席割り当てられていた。ゴルカル党内で影響力を持っていたデンゴールがダヤック人の議席を差配に関して大きな影響力を持っており、ダヤック人集落の村長や学校教師が議員として登用された。デンゴールは、元学校教師だったA. ランタンをカトリック教会職員としてクタパン市に呼び寄せた。A. ランタンは、インドネシア独立期、教会によってスラウェシ島のマナドの師範学校へ派遣されたのち、西カリマンタンに呼び戻され、バンタンによってスルンカ集落の学校へ配属された。その後、A. ランタンは、バンタンの娘と婚姻したため、バンタンの義息子にあたる²⁴⁾。デンゴールは、A. ランタンをゴルカル党の候補者名簿に登録させた。1992年、A. ランタンは県議会議員に選出されると同時に、クタパン県議会副議長に就任した。A. ランタンの息子であるマルティンは、1990年頃からクタパン県内で学校教師として勤務し、その後、カトリック教会が設立したウサバ財団（Yayasan Usaha Baik）の職員になった。レハールの長子P. レハールは、学校の教師として勤務していた。その後、P. レハールは県知事を補佐する常置政務機関（Badan Pemerintah Harian）の役員に登用された。1970年頃、P. レハールは県政府に異動しクタパン県庁教育局の人事課長ま

で昇進した²⁵⁾。P. レハールの息子ヘンリクスは、1988年に内務省アカデミーを卒業すると、クタパン県庁の役人に採用された。ヘンリクスは、1993年にジャワ島マランの大学を卒業すると、1997年にはクタパン県庁人事課長に着任した [Kalimantan Review 2010-Oct]。

スハルト体制期には、第一世代の親族のほかにも、都市部で教育を受けるダヤック人たちが現れた。新興のダヤック人政治エリートを生み出す原動力となったのは、ウサバ財団だった。ウサバ財団は、1952年にクタパンのカトリック教会の支援のもと、バンタンとデンゴールを中心に、カトリック信徒の社会福祉を向上させるために設立された財団である。財団の活動は小教区ごとの学校設立およびダヤック人のための奨学金の運営だった。財団の奨学金によってダヤック人の子供たちがクタパン市内で高等教育を受けることができるようになった。1990年代には、クタパン県内で郡長を務めるダヤック人もあらわれた。ただし、スハルト体制期に社会上昇を果たそうとしていたダヤック人たちの中で、地方政府官房で役職を得た H. デンゴールやヘンリクスに比肩する役職を得るものは現れなかった。

第二世代のダヤック人政治エリートは、カトリック教会の設立した学校や関連組織で職歴を積み、その後、県議会議員や地方政府の中堅ポストに着いた。ダヤック人たちはスハルト体制期の地方政府では圧倒的に少数派であり、地方政府で上級ポストに就くことができたものたちは、一握りのダヤック人たちだった。そして、クタパン県では地方政府の中枢部近くに身を置くことができたのは、バンタン、レハールそしてデンゴールの息子や孫たちなど第二世代の者たちだった。

6. 民主化期：新世代の台頭

1998年にスハルト体制が崩壊し、インドネシアは民主化の時代に移行した。スハルト体制期には任命制だった州知事と県知事は2001年からは間接選挙によって、2005年からは直接選挙によって選出されるようになった。西カリマンタン州各地でダヤック人県知事が誕生し、2008年には約50年ぶりにダヤック人の州知事が就任した。クタパン県でも2010年と2015年に2人のダヤック人県知事が誕生した。

スハルト体制直後の地方選挙では、地元出身のムラユ人だったモルケス・エフェンディ（以下、モルケス）が県知事に選出された。スハルト体制崩壊直後は、ゴルカル党の影響力が村落部にまで浸透しており、ゴルカル党が地方議会の第一党の座を維持した。ゴルカル党は同党クタパン県支部長だったモルケスを県知事に指名した。また副県知事にはクタパン県出身で NGO 活動家のダヤック人のマジユンが選出された。モルケスが県内のダヤック人たちの間で影響力の低いマジユンを副県知事に据えた明確な理由は不明である。ただし、地元で政治的な基盤を持たないマジユンを副県知事に据えることで、有力なダヤック人政治エリートの台頭を抑制するという判断があっただろう。直接選挙制度が導入されて以降、第二世代のダヤック人政治エリートが県知事選挙で競合するようになった。2005年、3組の県知事と副県知事候補のペアが県知事選挙で競合した。現職の副県知事だったマジユンは闘争民主党から県知事候補として出馬した。マジユンは副

県知事候補として、ムラユ人のアブドゥル・アイニン（以下、アイニン）を立てた。2005年の選挙では、当時、カトリック系の高校の校長だったP. デンゴールと県政府官房局集落行政部長だったヘンリクスがともに副県知事候補として県知事選に出馬した。マタン王族の末裔だったグステイ・ソフィアン（以下、ソフィアン）は、副県知事候補としてP. デンゴールとペアを組み、開発統一党、地方統一党そして民主党の支持を受け出馬した。他方で、ヘンリクスも副県知事候補として現職のモルケスとペアを組んで出馬した [Subianto 2009: 336]。モルケスやソフィアンなどのムラユ人県知事候補が、副知事としてP. デンゴールやヘンリクスを据えた背景には、直接選挙制度の導入がある。直接選挙制度導入後は、幅広い支持を調達するために、異なる民族や宗教的な背景をもつ候補の組み合わせで出馬することが慣例になった。そのため、ムラユ人候補者たちは知名度の高く集票力の見込まれるダヤック人名士たちを副県知事に擁立した。地方で知名度の高いダヤック人政治エリートは限られており、ダヤック人たちの間で広く知られた人物はP. デンゴールやヘンリクスといった第二世代のダヤック人政治エリートだった。選挙結果は、モルケス－ヘンリクス（得票率；42.92%）のペアがマジュン－アイニン（得票率；31.49%）およびソフィアン－P. デンゴール（得票率；25.58%）のペアに大差をつけて勝利した²⁶⁾。モルケスは、現職のあいだに構築した役人ネットワークと伐採企業からの献金を駆使することで、選挙戦を優位に進めることができた [Prasad 2016: 183; Subianto 2009: 336]。

2010年、クタパン県で初めてのダヤック人県知事が誕生した。2010年の県知事選挙は直接選挙によっておこなわれた。また2010年以降の選挙では、2007年にムラユ人人口の多い北部の沿岸地域がカヨウウタラ県としてクタパン県から分離したため、クタパン県内のダヤック人の比率が高まり、ダヤック人候補たちは有利な条件のもとで選挙戦を戦うことができた。同選挙には、4組の候補が出馬した。県知事として2期目を終えたモルケスは州知事選挙への出馬を計画しており、息子ヤシール・アンシャリ（以下、ヤシール）をゴルカル党から県知事選挙へ出馬させた。ヤシールは、バンタンの孫であるマルティンを副県知事候補に据えて出馬した。現職の副県知事だったヘンリクスはゴルカル党から闘争民主党に鞍替えして、県知事候補として出馬した。ヘンリクスが闘争民主党へ移党した背景には、2008年の西カリマンタン州知事選挙で、闘争民主党から出馬したコルネリスが州知事に当選し、約50年ぶりにダヤック人州知事が誕生したことがある。ヘンリクスは、ムラユ人の県議会議員のボイマン・ハルン（以下、ボイマン）を副県知事候補に据えて出馬した。またクタパン県出身のダヤック人であり、民族系NGOの会長だったメチェルが県知事候補として、ムラユ人副県知事候補ジャムフリ・アミル（以下、ジャムフリ）とペアを組んで出馬した。4組の中で有力候補だったのは、ヤシール－マルティンとヘンリクス－ボイマンの2組だった。2010年の県知事選挙で当選するためには30%以上の得票率を獲得する必要がある。しかし、第一回目の投票では30%の得票率を獲得した候補者がいなかったため、ヘンリクス－ボイマン（得票率；29.79%）とヤシール－マルティン（得票率；26.80%）の上位2組の間で第二回目の投票がおこなわれた [Pontianak Post 2010-25-May.]. 第二回選挙では、カト

リックが多く居住する地域におけるヘンリクスーボイマン（得票率；55,24%）の得票率が飛躍的に伸び、ヤシールーマルティン（得票率；44,76%）に勝利した [Pontianak Post 2010-13-July.; Prasad 2016: 183]。ヘンリクスーボイマンが第二回選挙で票を集中できた理由は、第一回投票でメチェルージャムフリを支持していたダヤック人たちがヘンリクスーボイマンの支持に回ったことが挙げられる。さらに、2010年の県知事選挙では、カトリック教会の神父たちがヘンリクスを支持したこともヘンリクスーボイマンの勝利の大きな要因だった。

2010年の県知事選挙では副県知事候補として敗れたマルティンが、2015年の県知事選挙で独立系候補として県知事選挙に出馬した。2010年の地方選挙の後、マルティンは西カリマンタン州議会議員に就任した。マルティンは、2015年の県知事選挙では、ダヤック人の県知事候補がいなかったことを見越して州議会議員を辞職するとともに、ゴルカル党に所属していたものの、独立系候補として出馬した²⁷⁾。マルティンは、副県知事候補にはジャワ人の地方役人のスプラトを据えた。他方で、現職の県知事だったヘンリクスは、元クタパン県議会議長のムラユ人とペアを組んでゴルカル党からの出馬を模索した。しかし、2015年のゴルカル党本部でのアプリザル・バクリ派とアグン・ラクソノ派の対立がクタパン県支部にも波及しており、ヘンリクスは出馬に必要な党からの書類を揃えることができなかった [Tribun Pontianak.com 2015-31-July.]。他方、闘争民主党はブギス人の県知事候補アンディ・ザマルティン（以下、アンディ）とダヤック人の副県知事候補カニシウス・クアン（以下、クアン）を擁立した。民主化期に数多くのダヤック人候補を擁立してきた闘争民主党が、ムスリムのブギス人を県知事候補に擁立したことは、多くのダヤック人の間で失望をもって迎えられた。現職の副県知事だったボイマンは県知事候補として、ムラユ人のグルダニ・アフマッド（以下、グルダニ）とペアを組んで出馬した。また、ダルマンシャとウティ・ルスハン（以下、ルスハン）という2人のムラユ人の泡沫候補もペアを組んで県知事選に出馬した。唯一のダヤック人県知事候補だったマルティンースプラトにとって、ダヤック人票を集中することが当選の条件だった。マルティンースプラトの支持者たちの間では「ダヤック人は一番でなければならない」というスローガンが聞かれた。他方で、アンディークワンは闘争民主党の組織力を駆使して選挙キャンペーンを展開した。アンディークワンの支持者の中には、「民族の長を選ぶのではない。行政の長を選ぶのだ」という国民主義的なスローガンを訴えるものもいた。2015年県知事選挙は、ダヤック民族主義と国民主義がどれだけ票を集めることができるかの戦いだった。選挙結果は、マルティンースワルディが内陸部のダヤック人居住地域を中心にアンディークワンに大差をつけた。他方で、アンディークワンの得票率は都市部では善戦したものの、内陸部のダヤック人居住地域で伸び悩んだ。結局、マルティンースワルディ（得票率；31,23%）が、アンディークワン（得票率；30,02%）、ボイマンーグルダニ（得票率；29,29%）、ダルマンシャールスハン（得票率；9,46%）を抑えて、民主化期の2人目のダヤック県知事として当選した²⁸⁾。

民主化期の地方選挙では、第二世代のダヤック人政治エリートたちが台頭した。第二世代の政

治エリートたちは、スハルト体制期には地方役人や学校教師として活動しており、政治経済的な地盤を築くことはできなかった。民主化期に、新世代のダヤック人政治エリートが台頭したのは、直接選挙制度が導入された2005年以降である。スハルト体制崩壊直後、新世代のエリートたちは副県知事や州議会議員として政治経歴を積みつつ、県知事のポストをめぐる競争してきた。とくに県知事候補として出馬したダヤック人たちが当選を続けていることは、ダヤック民族主義の高揚およびダヤック人が県知事でなければならないと考えるダヤック人たちの支持が、第二世代の政治的上昇の大きな要因になっていることを示している。

7. おわりに

インドネシアの地方エリートに関する研究では、オランダ植民地期から民主化期にかけての地方政治エリートの形成過程については焦点が当てられてこなかった。本稿は、西カリマンタン州クタパン県のダヤック人たちの中から、現在の地方政治エリートが形成された過程を明らかにしてきた。

20世紀初頭のカトリック教会の進出とともに、いちやくカトリックに改宗したスルンカ集落の首長層の子供たちの一部が、都市部で学校教育を受け伝道師や宗教教師となりダヤック人知識人になった。ダヤック人知識人たちは、蘭印民政期からインドネシア独立期にかけて、地方の行政組織に組み入れられることで政治エリートに転身した。インドネシア独立後の地方政府は蘭印民政期からの行政機構から大きな変化はなかった。他方で、スハルト体制期に新興のダヤック人政治エリートたちが台頭することはなかった。そのため、蘭印民政期に行政組織に組み込まれた一握りのダヤック人政治エリートたちが、村落部のダヤック人たちから乖離した社会集団として現れた。

都市部で暮らすダヤック人たちは、PDやカトリック教会を通じて地方エリートとしての政治的影響力や社会的威信を確立した。スハルト体制期、第一世代のエリートたちは世代交代を迎えた。第二世代のダヤック人政治エリートたちも、第一世代と同じように、高等教育を受け、カトリック教会の職員や学校教師を経て地方役人になった。ただし、スハルト体制期には、ダヤック人政治エリートの地位を上昇させるような変革はおこらなかった。また、ムラユ人やジャワ人たちが中堅から上級の役職を席捲する地方政治では、政治的権力を掌握する中心的なダヤック人政治エリートは現れず、第一世代の直系の息子や孫たちがダヤック人政治エリートの中核を形成していた。民主化期、実力の拮抗したダヤック人政治エリートたちが県知事のポストをめぐる競争に相互に競合するようになった。県知事選挙に出馬できたのは、民主化期に政治家に転身するうえで優位な社会的地位にあったダヤック人たちだった。クタパン県では、優位な社会的地位にあったダヤック人たちは、デンゴールの息子である学校教師だったP. デンゴール、レハールからの系譜を引く地方役人のヘンリクス、バンタンからの系譜を引く学校教師のマルティンなど、一部のダヤック人たちだった。さらに、2010年と2015年の県知事選挙において、県知事候補として出馬

したダヤック人候補が当選していることからわかるように、民主化期のダヤック民族主義の隆盛の中で、ダヤック人票を集中させることが当選の要因である。第二世代のダヤック人政治エリートたちは内陸部のダヤック人の支持に支えられることで、地方政治において台頭することができた。

ダヤック人政治エリートの世代的連続性の要因としては、西洋式の教育を受けた一握りのダヤック人たちが蘭印民政期に行政組織に組み込まれたこと、インドネシア独立以降も地方の社会勢力に布置に大きな変化はなく蘭印民政期のダヤック人政治エリートたちがそのまま体制に組み込まれたこと、そして、独立後も内陸部のダヤック人の都市への進出が進まず、第二世代のダヤック人たちの子息たちが第一世代の政治的地位を継承することで、エリート層が一部の親族の中で再生産されたこと、の3点を指摘することができる。とくに蘭印民政期からスハルト体制期にかけてバンタン、レハールやデンゴールなどの第一世代のエリートが行政組織に身を置いたことが、ダヤック人政治エリートの間に世代的な連続性をもたらした重要な要因だった。

本稿では、インドネシア独立期から民主化期までの歴史的な堆積が、親族関係で結ばれたダヤック人政治エリートの形成をうながしたことを指摘した。長期的な時間軸の中でインドネシアの各地方社会のエリートの形成の歴史に焦点を当てることで、地方各地における多様な地方エリート集団の布置が明らかになるはずである。とくに本稿の事例のように、民主化期以降、抑圧されてきた集団の中から政治エリートが台頭した地方社会においてもエリートの世代的連続性がみられるだろう。地方エリート形成過程の比較については今後の課題としたい。

付記

本論文は2017年度に京都大学に提出した博士論文の一部を加筆修正したものです。また、本論文は、第50回日本インドネシア学会における発表をもとにしています。本論文に関する調査の遂行にあたっては多くの方のご協力を頂きました。とりわけ故デンゴール氏の親族の方々からは、貴重な情報の提供やインフォーマントの紹介などの協力を賜りました。深く感謝の意を表します。また、地方政治エリートの系譜の確認および追加調査に関しては、T氏にご協力頂きました。本研究はJSPS 科研費（JP19K20544）の助成を受けた研究課題の成果の一部です。

注

- 1) 民主化期の県知事選挙期間中に県知事代行としてクタパン県に派遣された県知事代行を除く。クタパン県の県知事リストにもデンゴールの名前が記載されている一方、民主化期の選挙期間中の県知事代行は記載されていない。
- 2) P. Denggol 氏の連載は Kosa Kata (<https://www.kosakata.org/>) で閲覧可能である。連載では、デンゴールの出生からサンガウ県で布教活動を実施するまでの経緯が詳細に描かれている。同氏はデンゴールの伝記を出版予定であるが、本稿の執筆にあたっては参照していない。

- 3) 村落レベルでの体制転換とエリートの関係に焦点を当てた研究としては [MacWilliam 1999, Schouten 1998] があげられる。
- 4) 19世紀まではクタパン地域各地はマタン王族たちの領地だった [Barth 1896: 83-84]。ただし、オランダ植民地政府の統治が確立する過程で、マタン王族たちの権威も低下していった。1930年の記録によれば、自治領に再編されて以降のクタパン自治領の行政組織は次の通りである。マタン自治領はマタン下流地区とマタン上流地区の2つの地区 (onderafdeeling) に分かれていた。マタン下流地区はクタパン地区から構成されていた。クタパン地区の行政長は郡長 (demang) だった。マタン上流地区はマタン上流区 (行政長; 不在) とクダワンガン上流区 (行政長; マタン王族) の2つの区 (distrikt) に分かれていた。マタン上流区はサンダイ郡 (郡長; ジャワ人) とナンガタヤップ郡 (郡長; 不在) の2つの郡 (onderdistrikt)、クダワンガン上流区はトゥンバンティティ郡 (郡長; 不在) およびマラウ郡 (郡長; ジャワ人) の2つの郡からなっていた。それぞれの郡には郡長 (assisten demang) がいた [Militaire Memorie van de Onderafdeling Beneden-Matan 1930]。
- 5) 西部カリマンタン最初のカトリック教会は1876年にシンカワンに設立されたもののすぐに閉鎖された [Steenbrink 2008: 503]。その後、一時の中断期をはさみ、1905年から本格的に宣教活動が始まった。
- 6) 都市部に暮らす華人たちの中には中国やスマトラ島でカトリックに入信し西部カリマンタンに移住してきたものたちがいた [Steenbrink 2008: 503]。
- 7) カトリック教会が宣教を始めるさいには最初から司教区を設定するわけではない。カトリック教会はまず使徒座地牧区を設定する。さらに使徒座地牧区の組織化が進むと使徒座代理区に昇格させ司教を配置する [学校法人上智学院新カトリック大事典編集委員会 1998: 1168]。
- 8) 以下、Panitia Perayaan と省略する。
- 9) バンタンの息子 A 氏へのインタビュー、2018年2月23日。
- 10) レハールの孫 K 氏へのインタビュー、2018年9月22日。
- 11) デンゴールと同様に、クタパン市内で教師をしていたバンタンは日本軍による尋問を受け、レハールもサンダイ郡に逃避したものの日本軍に一時的に拘束された。
- 12) 1945年頃、3つの distrikt は kewedanaan と呼ばれる地区に名称が変更された。また、9つの onderdistrikt は kecamatan に名称が変更された。kewedanaan は現在の郡 (kecamatan) よりも広域であるため、本稿では地区という名称を使用する。
- 13) クタパン地域には市という行政単位は存在しないものの、本稿ではクタパンの中心地をクタパン市 (kota Ketapang) としてクタパン県全体を指す場合と区別する。また、一般的にはクタパン地域の中心部を指す場合は、クタパン市と呼ばれる。
- 14) バンタンの息子 A 氏へのインタビュー、2018年2月23日。
- 15) かつてのダヤック統一党クタパン支部のあった通りは、レハール通り (Gang Rehal) と呼

ばれ、現在でもクタパン市内のダヤック人たちの居住区になっている。

- 16) Penetapan Presiden Republik Indonesia Nomor 7 Tahun 1959 Tentang Syarat-Syarat Dan Penyederhanaan Kepartaian.
- 17) 多くのダヤック統一党員は親スカルノ派であり左派政党であるバルティンド党 (Partai Indonesai) へ移党した。また、一部のダヤック人政治エリートたちはカトリック党 (Partai Katolik) へ移党した [Tanasaldy 2012: 109-110]。
- 18) バンタンの息子 A 氏によれば定年のために引退ということであった。しかし、1959 年に地方議会が解散したことをきっかけとして引退した可能性もある。
- 19) バンタンの息子 A 氏へのインタビュー、2018 年 2 月 23 日。
- 20) レハールは、1973 年に設立された民主党クタパン支部長に就任しものの、再び県議会議員になることはなかった。
- 21) 1977 年、デンゴールはゴルカル党員として県議会議員に就任し、県議会副議長を務めた [Stefanus ed. 2018: 267]。
- 22) 1980 年頃までには、カトリック教会は内陸部のダヤック人集落に多くの教会や学校を建設しており、ダヤック人のカトリック教徒の数は 2 万人を超えていた [Boelaars 1991]。
- 23) H. デンゴールは、デンゴールがサンガウ県で布教活動をしていた頃に生まれ、サンガウ県のダヤック人の養子になった。APDN を卒業後、H. デンゴールはクタパン県で就職したものの、APDN への進学にデンゴールがどの程度関与していたかは不明である。
- 24) A. ランタンの娘 M 氏へのインタビュー、2019 年 10 月 10 日。
- 25) レハールの孫 K 氏へのインタビュー、2018 年 9 月 22 日。
- 26) [BPS Ketapang 2007] より筆者計算。
- 27) 以下で述べるように候補者を出さなかったゴルカル党の党員の一部は、マルティンの支持にまわった。
- 28) [BPS Ketapang 2016] より筆者計算。

参考文献

- Anderson, Benedict (1972) *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance, 1944-1946*. Ithaca, New York: Equinox Publishing.
- Badan Pusat Statistik Kalimantan Barat (2022) *Provinsi Kalimantan Barat Dalam Angka 2022*. Pontianak: Badan Pusat Statistik.
- Badan Pusat Statistik Ketapang (2007) *Kabupaten Ketapang Dalam Angka 2007*. Ketapang: Badan Pusat Statistik Ketapang.
- _____ (2016) *Kabupaten Ketapang Dalam Angka 2016*. Ketapang: Badan Pusat Statistik Ketapang.

- _____ (2022) *Kabupaten Ketapang Dalam Angka 2022*. Ketapang: Badan Pusat Statistik Ketapang.
- Barth, J. P. J. (1896) *Overzicht der Afdeeling Soekadana*, Reprint from *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*. Batavia: Albrecht, den Haag: M. Nijhoff.
- Boelaars, Huub J. W. M. (1991) *Indonesianisasi: Het Omvormingsproces van de Katholieke Kerk in Indonesië tot de Indonesische Katholieke Kerk*. Kampen; J. H. Kok.
- Chauvel, Richard (1985) Not a Revolution but a Counterrevolution, Audrey R. Kahin ed., *Regional Dynamics of the Indonesian Revolution: Unity from Diversity*. Honolulu: Univ of Hawaii, pp. 237–264.
- Davidson, Jamie, S. (2008) *From Rebellion to Riots: Collective Violence on Indonesian Borneo*. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Denggol, P. Y. (1994) *Suka Dukaku Selama Bertugas Sebagai Guru Agama Katolik Di Mualang (1 Agustus 1941 s/d 31 Desember 1946)*. Unpublished Typescript.
- Denggol, V, Heronimus (n.d.) *Hukum Adat Dayak Pesaguan*. Unpublished Typescript.
- Dewall, H. van. (1862) Matan, Simpang, Soekadana, de Karimata-eilanden en Koeboe (Westerafdeeling van Borneo), *Tijdschrift voor Indische Taal-, Landen Volkenkunde* 6-2.
- Donatus, P. (1936) Een Stukje Reëel Dajaks Leven, *Koloniaal Missie-Tijdschrift van de Indische Missie-Vereeniging* 19, pp. 5-8.
- Feith, Herbert (1962) *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia*. Ithaca, New York: Cornell University Press.
- Flavianus-Huybers, Pater (1924) Internaten op Borneo, *Koloniaal Missie-Tijdschrift van de Indische Missie-Vereeniging* 7, pp. 26-32.
- 学校法人上智学院新カトリック大事典編纂委員会編 (1998) 『新カトリック大事典第2巻』東京：研究社
- Hadiz, Vedi (2010) *Localising Power in Post-Authoritarian Indonesia: A Southeast Asia Perspective*. Stanford: Stanford University Press.
- Kahin, R. Audrey, ed. (1985) *Regional Dynamics of the Indonesian Revolution: Unity from Diversity*. Honolulu: Univ of Hawaii Press.
- 小池 誠、2014、「インドネシア・スンバ島におけるキリスト教の歴史と現状」『桃山学院大学キリスト教論集』、49、pp. 273-286.
- Langenberg, Michael van. (1985) East Sumatra: Accommodating an Indonesian Nation within A Sumatran Residency, in Audrey R. Kahin ed., *Regional Dynamics of the Indonesian Revolution: Unity from Diversity*. Honolulu: Univ of Hawaii, pp. 113-143.

- Lontaan, J. U. (1975) *Sejarah-hukum Adat Dan Adat Istiadat Kalimantan Barat*. Jakarta: Pemda Tingkat 1 Kalimantan Barat.
- Loon, Gentilis van. (1992) *Gods Eigen Volk: De Bekeringsgeschiedenis van de Mualangs op West-Borneo*. Tilburg: Missieprokuur Kapucijnen.
- Lucas, Anton (1985) The Tiga Daerah Affair: Social Revolution or Rebellion?, in Audrey R. Kahin ed., *Regional Dynamics of the Indonesian Revolution: Unity from Diversity*. Honolulu: Univ of Hawaii, pp. 23-53.
- Lulofs, C. (1914) *De Onlusten in de Buitenbezittingen*. Batavia: G. Kolff (reprint on demand, SN Books World).
- MacWilliam, Andrew (1999) From Lord of Earth to Village Head; Adapting to the Nation-state in West Timor, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkekunde* 155(1), pp. 121-141.
- Magenda, Burhan (1989) *The Surviving Aristocracy in Indonesia: Politics in Three Provinces of the Outer Islands (Volume I & II)*. PhD Thesis, Conrell University.
- Militaire Memorie van de Onderafdeling Beneden-Matan 1930*.
- Muskens, M.P.M. (1974) *Sejarah Gereja Katolik Indonesia: Jilid 3A: Wilayah-wilayah Keuskupan dan Majelis Agung Waligereja Indonesia Abad ke-20: Sumatera, Kalimantan, Sulawesi-Maluku, Irian Jaya*. Jakarta: Bagian Dokumentasi Penerangan, Kantor Waligereja Indonesia.
- 森下明子 (2015) 『天然資源をめぐる政治と暴力：現代インドネシアの地方政治』 京都：京都大学学術出版会
- 岡本正明 (2000) 「革命期を生きぬいた植民地期原住民行政官史 (パレン・プラジャ)：インドネシア・西ジャワ州の場合」 『東南アジア研究』 38(2): 203-225.
- _____ (2019) 「東南アジアにおける地方首長と政治王国論」 永井史男・岡本正明・小林盾 (編) 『東南アジアにおける地方ガバナンスの計量分析－タイ、フィリピン、インドネシアの地方エリートサーベイから－』 京都：晃洋書店
- Ooi, Keat Gin (2013) *Post-war Borneo, 1945-1950: Nationalism, Empire and State-building*. Oxford, Routledge.
- Ota, Atsushi (2010) "Pirates or Entrepreneurs?" The Migration and Trade of Sea People in Southwest Kalimantan, c. 1770-1820, *Indonesia* 90: 67-95.
- Panitia Perayaan 50 tahun Keuskupan dan 25 Tahun Uskup Ketapang (2004) *Jejak-jejak Perjalanan 50 Tahun Gereja Lolal Ketapang dan 25 Tahun Usukup Ketapang*. Bogor: Percetakan Grafika Mardi Yuana.
- Penders, Christiaan Lambert Maria (1968) *Colonial Education Policy and Practice in Indonesia: 1900-1942*. Ph. D. Thesis, Australian National University.

- Prasad, Karolina (2016) *Identity Politics and Elections in Malaysia and Indonesia: Ethnic Engineering in Borneo*. Abingdon, Oxon: Routledge.
- Robison, Richard and Hadiz, Vedi, R. (2004) *Reorganising Power in Indonesia: The Politics of Oligarchy in an Age of Markets*. Hong-Kong: Routledge.
- Schouten, M.J.C. (1998) *Leadership and Social Mobility in a Southeast Asian Society: Minahasa, 1677–1983*. Leiden: Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde.
- 白石隆 (1992) 『インドネシア—国家と政治』 東京：リプロポート
- Somers Heidhues, Mary F. (2003) *Golddiggers, Farmers, and Traders in the “Chinese Districts” of West Kalimantan, Indonesia*. Ithaca, New York: Southeast Asia Program Publications, Southeast Asia Program, Cornell University.
- Stefanus, Anom, ed. (2018) *100 Tahun Gereja di Serengkah: Catatan Harian P. Bernadinus Knippeberg, CP: Jejak-jejak Penyelamatan, di Tanah Kayong (Ketapang)*. Yogyakarta: Maharsa.
- Steenbrink, Karel (2007) *Catholics in Indonesia 1808–1942: A Documented History. Volume 2: The Spectacular Growth of a Self Confident Minority, 1903–1942*. Leiden; KITLV Press.
- _____ (2008) Cahpter Tweleve Kalimantan or Indonesian Borneo, In Jan Sihar Aritonang and Karel Steenbrink eds., *A History of Christianity in Indonesia*. Leiden: Brill, pp. 493–526.
- _____ (2015) *Catholics in Independent Indonesia: 1945–2010*. Leiden: Brill.
- Subianto, Benny (2009) Ethnic Politics and the Rise of the Dayak Bureaucrats in Local Election, in Erb Maribeth and Sulistianto Priyambudi eds., *Deepening Democracy in Indonesia ? Direct Elections for Local Leaders (Pilkada)*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Sukanda, Yan and Raji'in, F. (2007) *Kanjan Serayong: Ritual Kematian dalam Tradisi Dayak*. Ketapang: Yayasan Warisan and Kantor Inbupar.
- Tanasaldy, T. (2012) *Regime Change and Ethnic Politics in Indonesia: Dayak Politics of West Kalimantan*. Leiden: Brill.

<雑誌・新聞記事>

- Kalimantan Review. 2010-Oct. *Menanti Era Baru “Kemerdekaan Dayak” di Ketapang*.
- Pontianak Post 2010. 25-May, *Yasir-Martin dan Henrikus dan Boyman Maju Putaran Kedua*.
- Pontianak Post 2010. 13-July, *KPU Tetapkan Henrikus-Boyman Pemenang*.

<インターネット記事>

Tribun Pontianak.com

2015/07/31. Henrikus-Gusti Kamboja Ditolak KPU, Kesalahan Golkar.

(<https://pontianak.tribunnews.com/2015/07/31/henrikus-gusti-kamboja-ditolak-kpu->

kesalahan-golkar. 最終アクセス 2019 年 11 月 21 日).

Kosakata

Denggol, L., Paulus. 2020-10-29. PJ Denggol; Katekis yang Diburu Kempetai Jepang (Part-1)
(<https://www.kosakata.org/2022/10/pj-denggol-katekis-yang-diburu-kempetai.html>. 最終アクセス 2022 年 10 月 31 日)

_____ 2022. 11-01. PJ Denggol; Katekis yang Diburu Kempetai Jepang (Part-3)
(<https://www.kosakata.org/2022/11/pj-denggol-katekis-yang-diburu-kempetai.html>. 最終アクセス 2022 年 11 月 2 日).

